**『私からあなたへ』**

島村抱月さんへ

しまむらに手紙を書くのは初めてだと思う。ないよね？ラブレターとかそういう文化のあった時代に生まれていたら、多分いっぱい書いていたと思う。私の場合、手紙の方が正確に、落ち着いて気持ちを伝えられた気がする。あの頃の私はいつも落ち着きがなくて、慌ただしくて、思っていることをどれくらいしまむらに届けられていたんだろう。

　私がしまむらだったら、変なやつって感じてまともに相手しなかったと思う。だからしまむらは凄い。凄くて、感謝してる。しまむらはずっと私に向き合ってくれて、今もそう。いや今は向き合うんじゃなくて、並んでいられるのかな。そっちはそっちで、嬉しい。

　体育館の二階での時間は今も、あの温度を肌が覚えている。あの生温いものを共有しながら、しまむらはどうして、私の隣にいたんだろう？時々思い返しては不思議になる。私は一緒にいて面白い人間ではないと、少なくとも当時は自覚していた。しまむらはあの茹だるような暑さの体育館に、なにを求めてやってきていたんだろう？いつか聞いてみたいと考えていたから、今がいい機会だと思ってこうして書いている。手紙を読み終わったら、覚えているなら教えてくれると嬉しい。

　夏になると、よく高校時代を思い出す。私たちの原点が夏から始まっているからなのかな。あのときに私は多くの夢を見て、今、そのいっぱいの夢が全部叶わっている気がする。それこそ夢の中に浮かぶような毎日が続いて、ふわふわして、でもしまむらに触れていると目の前の光景が夢じゃないって感じられて、私は好き。安直な表現だけど、好き。好き。

　これは多分一度も話したことがなかったけれど、私は、しまむらとキスをする夢を見た。高校生のときの話。そこから、しまむらへの気持ちが始まったんだと思う。いや夢が先なのか、現実が先なのか本当のところは分からないけど、しまむらを意識するきっかけはそれだった。

　実際に初めてキスしたときはあの夢みたいに上手くいかなかったのを、今でも後悔しては頭を抱えることがある。書いていて今ももんどり打ちそうになった。このくだり消そうかなと思ったけどボールペンで書いていることに今気づいたので諦めるしかなかった。

私は昔、一人で生きていける人間だったと思う。一人で生きるしかない人間でもあった。でも今は、しまむらと一緒じゃないととても生きていける気がしない。生きる意味とかじゃなくて、私によって生きるってことそのものにしまむらがある。

　時々、それはどっちなんだろうって考える。私は強くなってのか、それとも弱くなったのか。

その答えを見つけるために、もっと、生きていこうと思う。

手紙なんて初めて書いて渡すけれど、結構、自分の気持ちを整えやすいものだと分かった。昔にこれを知っていたら、しまむらに毎朝手紙を渡していたかもしれない。そうしたらしまむらは私のことを郵便屋さんと呼んでいそうだなって想像して、今ちょっとおかしくなった。

それとここまで書いていて気づいたけど、やっぱり、ひらがなで書く方がしっくりくる。

私によってしまむらは、ずっとしまむらみたい。

これからも、しまむらが、しまむらでいてくれますように。

しまむら、愛してる。

安達桜